

1909 (明治42) 年 大きな要因となったと見られる。

に青森ーロシア・ウラジ オストク間が定期航路に 指定され、大阪商船の貨 客船「交通丸」が就航、 両港間の貿易が拡大する ことになった。同年6月 の初航海には青森港から 52人の乗客とともに8・

5万トン時代へ 青森リンゴ輸出

4

7トのリンゴが積み込ま れており、この年だけで 203トのリンゴが輸出 されている。

同年に浅瀬石村 (現黒 石市) の北山一郎がウラ ジオストックに「青浦商会」 を開業し、海外に初めて 販売拠点を設けることにな った。定期航路開設が

輸入国事情で量は変動

上藤崎)、佐藤宣作、白 戸商店 (以上弘前) らの

を記録している。ただ、 急激な輸出増加で早速価 格暴落を引き起こしたと 伝えられている。

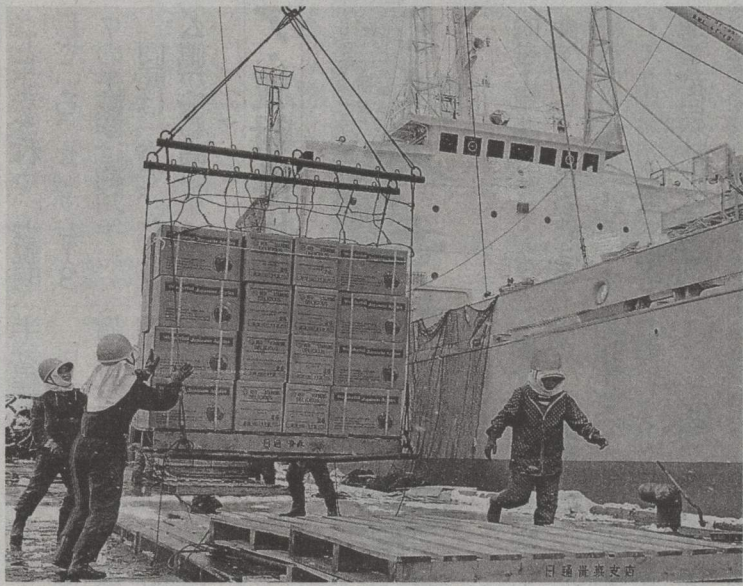
名前が登場し、輸出量も 前年の倍となる561ト

以上が輸出開拓の先駆 者たちの概況である。上 海の皆川洋行、ウラジオ

青森リンゴ輸出という

1907年前後に輸出 の機運が一気に高まり、 取り組みが進んだ。何人 かのトップランナーが青 森リンゴの輸出をけん引 してきたのではないかと 考えている。次回以降 は、そのうちの青浦商会 と皆川洋行に迫ってみた い。

海外市場開拓



日通洋行文庫

1903年、青森港で船 積みされる中東バイ向 けの県産リンゴ。本県で は1907年前後からリ ンゴ輸出の機運が高ま り、商人らが次々と市場 を開拓していった

(県りんご輸出協会事務 局長 深澤守)